
甘い。アマイ。

Light Up Field

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘い。アマイ。

【Nコード】

N4595E

【作者名】

Light Up Field

【あらすじ】

「オハヨウゴザイマス。茉莉」私にちよつかいをかける生粋の外国人リデュール。お願いだから止めてください。リデュールのスキンシップを嫌がる茉莉とそれでも諦めないリデュールの『甘い。アマイ。』話。

（前書き）

この作品はP G 1 2要素を含んでいます。
ご注意ください。

机に顔を置き爆睡。

学校であろうが何処であろうが関係ない。

最近学校でゆくつりとした時間の取れない私には、貴重な時間なのである。

私は学校に早く来て学校で寝るようにしている。そうすれば遅刻の心配は無い。朝早く学校に来るの理由は…アイツのアル行動を阻止するためである。

『ピピ・ピピ・ピピ』

セットしておいた机上の携帯のアラームが鳴る。もうこんな時間か。

むくりと起き上がる。脳は寝ぼけたままだ。寝ぼけた脳は再び眠りにつこうとし、瞼が落ち始める。

うつやバイ。ちゃんと起きなきゃいけないのに……

「オハヨウゴザイマス。茉莉」

言葉と同時に届いた頬に感じるあたたかい感触。この感触は…アイツの唇。

なにするんだーこのクソ男！

私の右手はうなりをきかせ、目の前にいきなり現れた男の方に向かっていく。

これを阻止するために早く来たのにー！

「ドウシタデスカ？」

不恰好な日本語が出る。目の前に現れた男の目はスカイブルー。

髪は金髪だが色素がだいぶ薄い。

相手は屈んでいるのにそれでも私はソイツを見上げる。要するに背が高い。

本物の…外国人さんだ。

コイツはリデュール・キマンター。

彼流の挨拶にも大分慣れたが、さすがに寝ぼけている頭にはきつかった。ほっぺにチュウ（別になれなくて慣れたわけじゃないけどさ。）

外国人さんにとってこれは当たり前としても、ココは日本だ。場所をわきまえろー！

「ドウシタンドスカ？つて…はあ。やめてくれないコレ？」

私はキスされたところを手でさする。目の前にいるのはめっちゃカッコイイ彼。

本当にやめてくれませんか？心臓に悪いんです。

いつの間にか教室は騒がしくなっている。大半の人が登校してきたようだ。カッコイイ男にはかなりの視線が集まる。

当然隣にいる私にも視線がくるわけですよ。

これはキツイ……

「イヤ？まいにちしてるじゃないですか？」

最初は大変だったけどコイツの行動に動じなくなった。恐ろしい速さで免疫がついたのだ。

今日は寝起きだったから、かなりびつくりしたけれど。

このエロ男！ こういうのを性的嫌がらせという。もしくはセクシャルハラスメント。セクハラは職場・学校で立場を利用したりして性的な行動・言動をすることだけでも勿論、リデュールはそんな立場ではない。でも『外国人さん』っていう立場を利用してるかも。でもまあ、本人はそんなこと考えてないだろうけどね。

「リデュール。何したいか知らないけど、ココは学校」

「がつこう？ハウスならいい？」

「よくない」

茉莉は間髪を入れずに拒否する。こちらは本気で怒っているのに、リディールは私の気持ちをどうも分かってくれない。私の拒否をはぐらかすように茶化す。

「リディール」

天の助け。リディールのホストファミリーの桑田君がこちらに向かってくる。

「リディール。学校で口説かない。したかったら、放課後にやってくれ」

『口説く』——あれは挨拶じゃないのか……。というかその前に『放課後』って、私を助けてはくれないのか！

「ぶーイヤです」

頬を膨らませ上目遣いをした彼は、とても愛らしいのだろう。クラスのあちこちから溜息が漏れた。

「可愛く言ってもダメ。栗江さんともんでもないものに好かれたね」
桑田君は『はっはー』とさわやかに笑う。

とんでもないもの……確かにそうだ。私は選べる立場ではないけれど、物静かで知的な人の方がタイプだ。

「いくら他の子と仲良くなっても、栗江さんにしかこんなことはないからねー」

本当に迷惑である。誰か代わってくれ。リディールの顔が好きな子はたくさんいる。その子を今度リディールに差し出してみるのもいいかもしれない。

「茉莉はやサシイ。シンセツ。だからスキ。」

はいーそんな言葉はここで言わないように。絶対周りが勘違いするからね。

リデュールの『スキ』は友達の好き。決して他の意味に捉えてはいけない。

「はいはい。分かった分かった。リデュールに言わせれば桑田君も『スキ』に入るよね？」

「何で俺?!」

傍観していた桑田君は突然振られ、慌てふためく。

「タシカニ鎮まもるもスキ」

リデュールは桑田君をからかうのを心得たようで、のってくる。

「…冗談はよしてくれ」

「おいリデュール！ 栗江！ もうからかうのはやめてやれ！」
威勢のいい先生が教室に入ってきて、私たちの桑田君いびりも終わりをつける。ちっ。

「さあ今日も一日元気に過ごすぞー！」

桑田君は疲れたように、リデュールはしぶしぶ自分の席に着いた。

* * *

授業が終了放課後がくる。すなわち、私の戦いが始まるときである。

「茉莉くつかれましたーカエリマシヨウ」

立ち上がった私にすぐにハグしてくるリデュール。ひつつくな！

暑苦しい！

「リデュール。離して」

私は思う。リデュールの行動はオーバー過ぎじゃないか？

久しぶりに会うならまだ分かる。だが朝も休み時間も会ったし、話もした。やけに今日はしつこい。私は冷静に対応するように努めている。慌てると向こうがつけ上がるから。

「イヤイヤ。はなさないです」

あんたは幼児か！ 幼稚な日本語だから余計にそう聞こえるんだな……さすがに、これだけ振り回されると疲れる。

「今日はゼツタイ『くどき』マス」

くどきマス？あなた言葉の意味分かってますか？

困惑顔の私にリデュールは眉を寄せる。

「ドウスレバイイ……？ ドウスレバわかっててくれる？ モットにほんごジョウズになれば……わかる？」

私に聞かれてもどうしようもない。リディールの何を分かればいいの？

リデュールは私の頬を両手で包み込む。

な・何するのよ……！

私の叫びは声にならずリデュールの空色の瞳に全て吸い込まれる。急激に空色の瞳が私に近づく。

リデュールの唇は私の頬にふれ、瞼にふれ、額にふれ、鼻にふれる。そして最後に私の唇と重なる。触れるだけのキス。何故か悲しく空色の瞳が揺れる。

「茉莉……もつと」

先程のキスでかなり動転していた私は、びくりと体を震わす。……もつと？

リデュールは唇をもう一度味わう。角度をかえ幾度もはまれる。今度は口を開かせ口内を侵す。リデュールは目を閉じていたが、私はそんなことできるはずがない。慣れないことに、だんだん呼吸が苦しくなる。

暫くずつと2人は固まっていたが、リデュールは我に返ったように茉莉を放す。その瞳に先程の悲しい影は無いみたい。

「茉莉ダイジョウブですか？」

リディールは申し訳無さそうに茉莉の顔色を窺った。

「大丈夫に見える？呼吸が出来なくて死ぬかと思ったわよ！」

ずっと下を向いていた茉莉だが爆発したように怒り始めた。

彼女に怒鳴りつけられたリデュールは、どこか楽しそうに笑う。

二人の楽しくて甘い、アマイ時間。

リデュールは茉莉にアマイ心を抱く。では茉莉は？

茉莉が甘い心を抱くのは…… まだまだ後のこと。

「リデュール、栗江さん。ここ教室……」

リデュールの腕の中にいる茉莉に届いた、桑田の消えそうな声。

「あ」

二人は顔を合わせて苦笑いしたのでした。

（後書き）

修正実行前は英語が使われていましたが全て直しました。修正前を読まれた方、申し訳ありません。

修正前に比べてリデュールにはなにかありそうな雰囲気を漂わせています。

それが明かされるのはいつになるやら……。

月のしずくさんから茉莉とリデュールの絵をいただきました。

アルバム↓<http://lightupfield.coccolog-nifty.com/photos/arubamu/index.html>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4595e/>

甘い。アマイ。

2010年10月8日14時56分発行